

O1-037

発達障害のある人の就労とレジリエンスの
関連について赤間 公子^{1,2}、石山 めづ美³、佐藤 耕²、
金納 史佳²¹帝京学園短期大学 保育科、²子どもの発達・学習研究所ユレーカ、³常葉大学 保育学部保育学科

【目的】

発達障害のある人への就労支援については、障害特性やジョブマッチング、また周囲の理解の促進といった側面等から近年、研究や報告がなされている。発達障害のある人の就労、またその継続は大変厳しい現状である。今回、様々な困難を乗り越えて就労を継続している3名の事例を報告する。対象者が就労時またそれを継続するにあたって直面してきた困難をいかにして乗り越えてきたかということについて、レジリエンスとの関連に着目して研究した。

【方法】

対象：(1)22歳男性(診断名：広汎性発達障害(診断時) 就労期間3年7か月 ソーシャルスキルトレーニング=SST6年継続中)(2)22歳男性(診断名：発達障害(診断時) 就労期間6か月 SST11年継続中)(3)24歳女性(診断名：広汎性発達障害・学習障害(診断時) 就労期間6か月 SST11年継続中)にレジリエンス質問紙、保護者への半構造化面接の実施により考察する。

期間：2016年11月～12月に調査実施

方法：1. レジリエンス質問紙：平野(2010)による「二次元レジリエンス要因尺度」および井津・中村(2008)による「環境資源の活用尺度」のうち回答者の負担を配慮して39項目抽出した。前者は、「気質」「性格」といった内的要因に焦点を当てたもの、後者の尺度は「家族」「友人」といった周囲のソーシャルサポートの活用についての尺度である。2. 半構造化面接では「就労の経緯」「就労に至るまでまた就労時の困難」「困難への対処」「周囲の支援」について聞き取った。

【結果】

1. 質的要因において三人に共通する点は『統御力』と『行動力』の得点が比較的高いことであった。また、獲得的要因においては、『自己理解』の得点が高かった。また、環境資源尺度においてはいずれの得点も高かった。2. 半構造化面接では、就労の困難さ及び継続のためにどのように周囲の支援とつながっていったかということを開き取った

【考察】

彼らはレジリエンス要因の内『統御力』および『行動力』『自己理解』の高さによって自分をコントロールし就労を継続する力とすることがわかった。加えて、社会的資源とのつながりを継続する重要性が示唆された。一方『問題解決志向』の得点の低さが認められ、こうした側面への周囲の支援が必要であると考えられた。

O1-038

神経発達症の子どもへの余暇支援
一余暇支援サークル「ビークル」活動報告一中塚 志麻¹、高田 哲¹¹神戸大学大学院保健学研究科、²くらしき作陽大学 子ども教育学部子ども教育学科

【はじめに】

障害児余暇支援サークル「ビークル」は、大学関係者が、倉敷市内に在住する神経発達症の児童・生徒の余暇を充実させることを目的として活動している。本活動の意義には、障害児の余暇の充実に貢献すると共に、サポートする学生が 1)余暇支援、2)兄弟児支援、3)レスパイトケアの3つの観点から支援の在り方を学んでいくことも含まれている。今回は、対象児の自己選択・自己決定を重視した本年度の余暇支援活動を報告する。

【運営方法】

1)参加者：倉敷市内在住の障害のある子どもとその保護者各13名(子どもの内訳：小学生4名、中学生6名、高校生2名、社会人1名)、兄弟児12名(内訳：幼児1名、小学生8名、中学生2名、高校生1名)本学学生42名(4年生13名、3年生8名、2年生16名、1年生5名)教員3名。

2)場所・活動回数・時間：定例会；本学講義室及び特別支援教育ラボ。定例会8回(おでかけ3回。学生への事前・事後指導8回)。

【活動内容】

1)第1回ボウリング：対象児は、その特性から同世代の友だちと会話したり触れ合ったりすることが少ない。しかし、ボウリングという活動を通じて、グループ内の友達同士で、応援したり、ストライクが出た時にハイタッチしたりする場面が見られ、コミュニケーションの向上が伺われた。

2)第2回津山：学びの鉄道館：公共機関を利用した長距離の移動であったが、学生の支援を受けながら子ども達同士でおやつ交換をしたり、ゲーム遊びをしたりして、楽しく過ごすことができた。また、電車を利用する際のマナーについても、学生のサポートを通じて学ぶことができた。

3)第3回イオンモール岡山：お買い物：子ども達が決められたお小遣いの中で買う品物を決定する過程(インターネットや情報誌を活用)を、学生がサポートした。また、グループの仲間とプリクラをすることで、会話が広がり、友だち同士の交流を深めることができた。

【今後の課題】

本年度において、保護者からは 1)よりいっそうの移動スキルの向上、2)兄弟児にも支援方法を教えて欲しいの2点の要望があった。これらをふまえて、来年度は、障害児だけで移動する経験を含めた活動計画や兄弟児にサブスタッフ的な役割を担う等を目標にして活動に取り組んでいきたい。